

宗田一先生を悼む

日本医史学会常任理事 深瀬泰旦

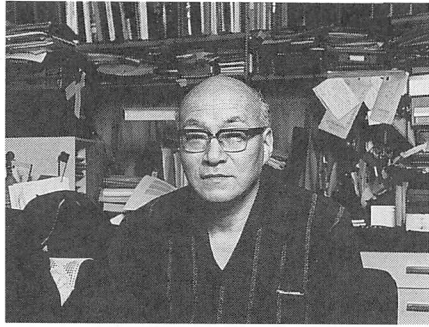
今年の一月、恒例の医史学会役員会がおこなわれた日のことである。お茶の水駅をおりて順天堂大学の会議室にいそいでいたわたくしの前に、宗田先生のお姿がみえた。足早においついて、遠路はるばるおいでになったお骨折りにご挨拶申しあげた。ほんの十分たらずの道のりであったが、ご一緒する先生の足取りがいかにも重い感じをうけた。

昨年名古屋の総会の折、ホテルから評議員会の会場までご一緒したことがあった。開会の時刻がせまっていたので、「先生いそぎましょう」とすこし足早に会場にいそいだ。そのときの足の運びとこの日の歩みの様子との差に、どうかなさったのだろうかと訝しくおもったものだった。

会議がおわって新年会の席にうつったところ、いつものようにお酒をのまれているご様子を拝見し、いつものような張りのある話し声をお聞きして、わたくしの思いは杞憂にすぎなかったな、とほっとした思いであった。

あれから半年、杞憂がいつまでも続いてほしいというわたくしの願いもむなしく、先生は忽然と逝ってしまった。わたくしにはどうしても、忽然という思いがはなれない。

昨年の阪神大震災によって、京都のご自宅の被害はほとんどなかったということだったが、書庫にあふれるほどの膨大な史料や書籍が書棚から落下して、散乱した。それを元の棚にもどすのには難渋をきわめたという。「年をとると根気がなくなつてだめだよ」と寂しそうにお顔で訴えられた。この思わぬ災害に、執筆中の連載を中断せざるをえなかった先生の心境はいかばかりであったろう。これが先生の生命を縮めたとはいえないだろうか。



宗田一先生の書齋にて
(石原理年評議員提供)

先生の医史学の学殖豊かなことは、われわれ会員の誰もが知っている。考証の確かさ、事実をつみかさねて緻密な考証をくわえる手堅さは、何人も真似のできない境地であつた。一方医史学によせる情熱に計りしれないものがあることも、会員周知のところである。これを車の両輪にして、驚嘆に値する数々の業績が生まれた。『図説日本医療文化史』は、この様な中から生まれた畢生の大作といえよう。ご所蔵の史料を縦横に駆使して毎月休むことなく連載がつづけられ、延々八年におよんだ。「早く編集者にわたさないと落ちつかなくてね」という先生は、早め早めに原稿を編集者にわたしていたという。おそらく編集者にとっては願ってもない、ありがたい執筆者であつたにちがいない。

『ご所蔵の『講筵筆記』や『官版薬局方』を拝見したいと厚かましいお願いをしたところ、つぎの医史学会例会の日にわざわざお持ちいただき、いとも簡単に貸してくださった。貴重な史料を物惜しみする気配もなく、気軽に貸していただけたらと夢にも思っていなかっただけに、その鷹揚なお気持ちになんと申し上げたらよいのか、一瞬その言葉を失なってしまった。

先生が学問の上では、決して妥協をゆるさなかつたことはよく知られている。ときにはそれが頑固にうつつて誤解されたこともあつたのではないだろうか。ある年の洋学史学会のことであつた。話が種痘のことにおよび、発表者が牛痘接種法と人痘接種法の区別を明らかにせずに議論をすすめた。質問にたつた先生は、この点を鋭くつかれて、このような議論の進め方では混乱をますばかりで、正鵠をえた結論をうることは難しかろうとのべて、医学的にきつちりおさえないければ意味がない、とむすばれた。先生のいわんとすることに医学畑の人間は共鳴するところがあつたが、「医者でな

ければこの問題に発言してはいけないのか」という非難にも似た声があったのも、また事実であった。

今年の札幌の総会では、残念ながら先生の講演をおききすることはできなかつた。かえりみると第五九回総会（一九五七年）には、もつとも得意とされた「蘭方製薬史」と題する演題——おそらくこれが総会での最初の発表であろう——がみられる。その後のつみかさねの上に、第六六回総会（一九六五年）では特別講演の演者として「日本製薬技術史の研究」を発表された。あらかじめまとめた原稿を『日本医史学雑誌』の一号すべてをついやして、一三七ページの原著として会員に配付したという。豊富な史料や蔵書を十分に活用した論考は、薬学出身の先生ならではの輝きにみちたものとして現存している。学会誌の一号すべてを単独の論文でしめるといふ快挙は、今にいたるまでその例をみない。以後毎年の総会には欠かさず演題を提出しておられ、その研究領域もますます広汎にわたっていた。

まさに生涯現役として、学問に殉じた一生といえよう。